

愛知県生涯学習審議会の報告について

このことについて、愛知県生涯学習審議会から建議がありましたので、別紙資料に基づき報告します。

平成28年3月28日

生涯学習課



平成28年2月17日

愛知県教育委員会 殿

愛知県生涯学習審議会  
会長 大島 伸一

超高齢社会に対応した生涯学習の在り方について（建議）

超高齢社会に対応した生涯学習の在り方について、審議を重ねてきましたが、別添のとおり取りまとめましたので、ここに建議します。

## 超高齢社会に対応した生涯学習の在り方について

～超高齢社会において、人々が世代を超えて、ともに豊かに生きる  
ためには、生涯学習の視点からどのようなアプローチができるのか～

(建議)

平成 28 年 2 月

愛知県生涯学習審議会

## はじめに

日本は世界で最も高齢化の進んだ国である。平成 19 年には、65 歳以上の高齢者（以下「高齢者」という。）の割合が 21%を超えて、世界で最初に「超高齢社会」が到来している。その後も高齢者の割合は増え続け、平成 26 年には 26.0%となり、実に日本の人口の 4 人に 1 人以上が高齢者となっている。

高齢化の進展について、本県も決して例外ではなく、全国的にはその進展は遅い方であるが、平成 24 年にはその割合が 21.3%（国は 24.1%）となり、21%を超えて「超高齢社会」を迎えている。そして、平成 27 年版高齢社会白書（内閣府）によると、平成 52 年には 32.4%まで上昇し、およそ 3 人に 1 人が高齢者となると予測されている。

本来、長寿というのは人類の永年にわたる夢である。医療技術の飛躍的な進歩や社会、経済の発展など様々な要因により、これを実現した社会は人々が待ち望んだ社会であり、長寿社会の到来は誇るべきものであるはずのものである。しかしながら、それが「課題」として捉えられる背景には、高齢者に対して、「既に役割を終え、社会から支えられる者である」という固定観念があることが理由の一つであると考えられる。

しかし、私たちの周囲を見ても、非常に多くの健康な高齢者がいる。実際に本県の「健康寿命」（平成 22 年）は男性が 71.74 年で全国 1 位、女性は 74.93 年で全国 3 位となっており、日常生活を送るのに特段支障のない「健康長寿高齢者」は、65 歳以上の高齢者の 83.7%にのぼる。

また、高齢者にはこれまで培ってきた知恵と経験という何物にも代え難い貴重な財産がある。超高齢社会における最大の財産は高齢者自身であり、高齢者はそれぐらい大きな潜在能力を有している。こうした見方を持てば、超高齢社会に対する印象が大きく変わってくるはずである。

世界的にも例を見ない、いまだかつて誰も経験したことのない超高齢社会において、人々が世代を超えて、ともに豊かに生きるためには、生涯学習の視点からどのようなアプローチができるのか。長寿を感謝し、与えられた時間をどのように使うかは各個人の自由であるが、様々な活動を通じて、社会に参画していきたいと思う人が少なからず存在している。

本報告書は、そうした人々のニーズに応え、社会参画に繋げていくにはどのようにすれば良いのか、これまでの地縁・血縁的なつながりから、地縁・血縁にとどまらない新たなつながりやコミュニティを創り出し、社会的に拓げていくにはどのようなことが必要であるのか、高齢者だけでなく、あらゆる世代の人々が豊かな超高齢社会を迎えることができるよう、愛知県生涯学習審議会で審議し、その結果を取りまとめたものである。

## 目 次

### 第 1 章 超高齢社会の現状について

- 1 愛知県における高齢化の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
  - (1) 本県全体の状況
  - (2) 地域別の高齢化の状況
- 2 愛知県における地域活動の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
  - (1) 地域活動の参加経験
  - (2) 参加した地域活動
- 3 高齢者の社会との関わり・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
  - (1) 就労に関する意識
  - (2) 社会参加活動への意識
  - (3) 自主的な活動と生きがいの有無

### 第 2 章 超高齢社会における生涯学習の意義

- 1 生涯学習の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
- 2 高齢者の特長・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
  - (1) 豊かな経験と知恵
  - (2) 喪失の経験
  - (3) 他者との関わり
- 3 超高齢社会における生涯学習の意義と期待される役割 ■■■・・・・・・・・ 13

### 第 3 章 超高齢社会に対応した本県における取組

- 1 充実感の創出や健康の維持に向けた取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
- 2 世代間交流の促進や地域への貢献に向けた取組・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

<b>第4章</b>	<b>県内の市町村等における先進的な取組</b>	
1	世代間交流の促進に向けた取組	22
2	地域への貢献に向けた取組	26

<b>第5章</b>	<b>超高齢社会に対応した生涯学習の在り方</b>	29
------------	---------------------------	----

<b>資料編</b>		
	あいちシルバーカレッジ受講者等へのアンケート	43
	市町村における市民大学等（高齢者大学等）の設置状況	55
	報告書作成に向けた検討経過	63
	愛知県生涯学習審議会委員名簿	64

## 第1章 超高齢社会の現状について

### 1 愛知県における高齢化の状況

#### (1) 本県全体の状況

総人口に対する 65 歳以上の人口の占める割合を高齢化率と言い、WHO（世界保健機構）や国連の定義によると、高齢化率が 7%を超えると「高齢化社会」、14%を超えると「高齢社会」、21%を超えると「超高齢社会」とされている。

愛知県では平成 24 年に高齢化率が 21%を超え、「超高齢社会」に入った。そして、平成 26 年の総人口は 746 万人（平成 26 年 10 月 1 日現在）で、そのうち 65 歳以上の高齢者（以下「高齢者」という。）は 173 万人、高齢化率は 23.2%となっている。平成 23 年から 26 年にかけての毎年の人口増加を見ると、総人口が 1～2 万人であるのに対し、高齢者人口は 6～8 万人となっており、近年、高齢化が急速に進行している。

また、今後も高齢者は増加するが、「団塊の世代（昭和 22～24 年生まれ）」が後期高齢者（75 歳以上）となる平成 37 年には総人口は減少し、高齢化率が 26.4%まで上昇することが見込まれる。特に、後期高齢者の割合は大きく増加し、前期高齢者と後期高齢者との割合が逆転すると推計されている。

#### 【愛知県における人口の推移】

	平22年	平23年	平24年	平25年	平26年	平37年	平47年	
愛知県の総人口(万人)	741	742	743	744	746	735	705	
高齢者人口	149	152	158	165	173	194	208	
	うち 65～74歳	84	84	86	91	96	78	89
	うち 75歳以上	65	68	72	74	77	116	119
高齢者割合※	20.1%	20.5%	21.3%	22.2%	23.2%	26.4%	29.5%	
	(23.0%)	(23.3%)	(24.1%)	(25.1%)	(26.0%)	(30.3%)	(33.4%)	
	うち 65～74歳	11.3%	11.3%	11.6%	12.2%	12.9%	<b>10.6%</b>	<b>12.6%</b>
	(11.9%)	(11.8%)	(12.2%)	(12.8%)	(13.5%)	(12.2%)	(13.4%)	
	うち 75歳以上	8.8%	9.2%	9.7%	9.9%	10.3%	<b>15.8%</b>	<b>16.9%</b>
	(11.1%)	(11.5%)	(11.9%)	(12.3%)	(12.5%)	(18.1%)	(20.0%)	

※高齢者割合について、上段は愛知県、下段( )は全国平均

資料：平成 26 年は総務省「人口推計」。平成 22 年～25 年は「あいちの人口」から、平成 37 年、47 年は国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成 25 年 3 月推計）」から生涯学習課にて作成

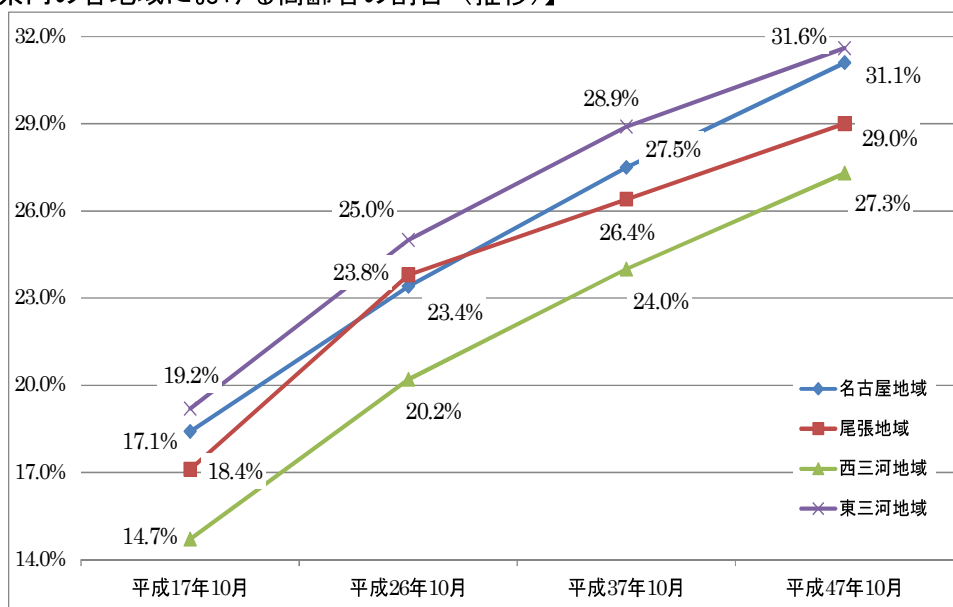
## (2) 地域別の高齢化の状況

### (ア) 高齢者の割合

平成 26 年 10 月の時点で、県内の各地域（名古屋、尾張、西三河、東三河）について、いずれも高齢化率は 20%を超えているが、特に東三河地域は 25.0%と高く、4人に1人が高齢者となっている。一方で、西三河地域の高齢化率は 20.2%となっている。

また、今後、高齢化率が最も上昇するのは名古屋地域であり、東三河地域と並び、平成 47 年には 3 割を超えると推計されている。

【県内の各地域における高齢者の割合（推移）】



資料：平成 17 年は「国勢調査」、平成 26 年は「あいちの人口」から、平成 37 年、47 年は国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成 25 年 3 月推計）」から生涯学習課にて作成

さらに、市町村ごとの高齢化率は次表のとおりとなっている。最も高い東栄町の 49.8%に対し、最も低い長久手市では 14.6%で、高齢化率に 3 倍の開きが生じている。

また、高齢化率の上位にある東栄町、豊根村、設楽町、新城市（旧鳳来町、旧作手村）は、いずれも「過疎地域自立促進特別措置法」に基づく過疎地域であり、人口の減少とも相まって非常に厳しい状況となっている。



【県内の各市町村における高齢化率（平成26年10月時点）】

市町村名	高齢化率	市町村名	高齢化率	市町村名	高齢化率	市町村名	高齢化率
東栄町	49.8%	一宮市	25.0%	西尾市	23.5%	岡崎市	21.0%
豊根村	47.9%	田原市	25.0%	名古屋市	23.4%	東海市	20.8%
設楽町	46.6%	阿久比町	25.0%	豊橋市	23.4%	豊田市	20.1%
南知多町	33.3%	あま市	24.9%	東浦町	23.2%	大府市	20.1%
新城市	32.0%	常滑市	24.8%	武豊町	23.1%	大治町	19.7%
飛島村	28.6%	稲沢市	24.6%	北名古屋市	23.0%	幸田町	19.7%
愛西市	28.4%	知多市	24.5%	清須市	22.7%	日進市	19.1%
蒲郡市	27.4%	豊川市	24.2%	大口町	22.7%	安城市	19.0%
瀬戸市	27.2%	豊明市	24.1%	半田市	22.3%	高浜市	18.9%
犬山市	27.2%	弥富市	23.9%	碧南市	22.3%	知立市	18.8%
津島市	27.0%	春日井市	23.7%	小牧市	22.3%	刈谷市	18.4%
江南市	25.6%	岩倉市	23.7%	豊山町	21.7%	みよし市	16.2%
美浜町	25.6%	尾張旭市	23.6%	東郷町	21.2%	長久手市	14.6%
扶桑町	25.2%	蟹江町	23.6%				

～ 超高齢社会（21.0%超）～

～ 高齢社会～

過疎地域（豊田市は旧小原村、旧足助町、旧旭町、旧稲武町）

資料：「あいちの人口」から生涯学習課にて作成

（イ）高齢者世帯の状況

高齢者世帯（65歳以上の高齢者のいる世帯）の割合について、県全体では3世帯に1世帯が高齢者世帯となっているのに対し、東三河地域では4割近くとなり、その割合が最も高くなっている。

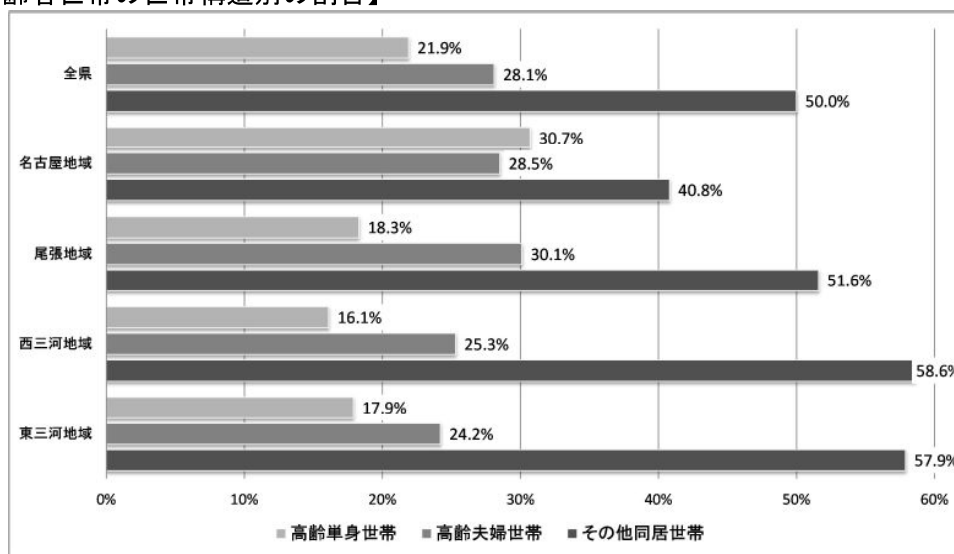
【県内の各地域における高齢者世帯の割合】（単位：％）

全 県	名古屋	尾張	西三河	東三河
33.9	31.6	36.3	30.7	39.5

資料：国勢調査（平成22年）

また、その内訳について、県全体の高齢単身世帯の割合が21.9%であるのに対し、名古屋地域の高齢単身世帯の割合は3割を超え、他の地域と比較すると、その割合が著しく高くなっている（尾張：18.3%、西三河：16.1%、東三河：17.9%）。その他同居世帯の割合についても、名古屋地域と尾張・西三河・東三河地域とではその状況が逆転している。

### 【高齢者世帯の世帯構造別の割合】



資料：国勢調査（平成 22 年）



高齢化が進行し、4人に1人の割合で高齢者がいる地域と5人に1人の地域とがある。

さらに市町村別にまで目を向ければ、高齢化率が上位にある市町村は、同時に過疎地域でもあるなど、高齢化にかかる地域間の差はさらに大きくなる。また、高齢単身世帯の割合が名古屋地域で3割を超えている一方、その他の地域はいずれも2割に満たず、世帯構造についても地域によって、その状況は異なっている。

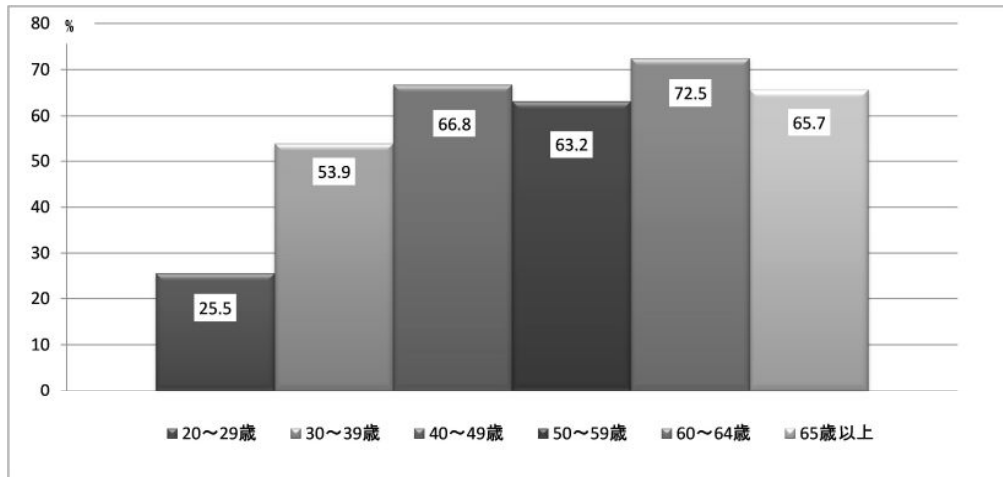
以上のことから、一口に愛知県と言っても、地域によってその状況は大きく異なり、施策を実施するに当たっては、地域が置かれている状況や今後の見込みなどを十分に考慮する必要がある。

## 2 愛知県における地域活動の状況

### (1) 地域活動の参加経験

ここ1年の間の地域活動への参加経験を尋ねた平成25年度の県政世論調査によると、その割合が最も高いのは「60～64歳」でその割合は72.5%にのぼり、この年代はおよそ4人に3人が何らかの地域活動に参加した経験を有している。年代の上昇とともに参加経験の割合は増加しているが、「50～59歳」の年代で、その割合がいったん減少している。

#### 【参加したもの（地域活動）がある】



資料：平成25年度第2回県政世論調査から生涯学習課にて作成

### (2) 参加した地域活動

年代別の地域活動への参加意向と参加経験、両者のギャップについては次表のとおりである。このギャップについては、参加意向から参加経験を減じた値であり、マイナスが大きい場合には、必ずしも参加意向には沿っていないことになり、プラスが大きい場合には、参加意向があるにも関わらず、十分な参加ができていないというミスマッチが生じていることになる。

【地域活動への参加意向と参加経験】（上段：参加意向、  
中段：ギャップ、下段：参加経験）

	20～ 29歳	30～ 39歳	40～ 49歳	50～ 59歳	60～ 64歳	65歳以上	
(A)	道路・公園の清掃活動や 草取りなどの共同作業	7.7 1.6 6.1	12.8 ▲ 11.0 23.8	19.4 ▲ 15.4 34.8	17.8 ▲ 16.6 34.4	24 ▲ 13.4 37.4	25.8 ▲ 10.7 36.5
	自治会・町内会・ 老人クラブなどの活動	2.6 0.6 2	9.1 ▲ 9.4 18.5	9.2 ▲ 17.0 26.2	12.5 ▲ 13.3 25.8	20.2 ▲ 10.0 30.2	22.5 ▲ 14.0 36.5
	運動会・盆踊り・お祭りなど レクリエーション活動	19.9 10.7 9.2	28.3 ▲ 2.3 30.6	20 ▲ 13.2 33.2	13.1 ▲ 6.8 19.9	14.9 ▲ 6.5 21.4	16.9 ▲ 3.3 20.2
	廃品回収や不用品の交換会 などのリサイクル活動	6.1 3.0 3.1	9.4 ▲ 9.5 18.9	12.6 ▲ 12.9 25.5	11.9 ▲ 7.4 19.3	13.7 ▲ 6.9 20.6	15.7 ▲ 5.6 21.3
	PTA活動	0.5 0.0 0.5	4.5 ▲ 6.1 10.6	5.8 ▲ 12.7 18.5	1.5 ▲ 1.8 3.3	0.4 ▲ 0.7 1.1	1.1 ▲ 1.1 1.1
子ども会や少年スポーツ チームの指導や世話	10.2 7.6 2.6	10.6 ▲ 0.7 11.3	6.8 ▲ 5.5 12.3	4.7 1.1 3.6	3.1 1.6 1.5	2.8 0.6 2.2	
(B)	野球やバレーボールなど、 スポーツのサークル活動	19.9 14.3 5.6	20.8 12.1 8.7	14.2 7.4 6.8	12.8 4.8 8	10.7 3.4 7.3	8.4 1.1 7.3
	音楽・写真・学習会など、 文化サークル活動	11.2 8.1 3.1	16.6 15.1 1.5	19.4 15.4 4	19 14.3 4.7	20.2 10.3 9.9	20.2 8.4 11.8
(C)	防火や防災訓練活動	8.2 6.7 1.5	14 6.5 7.5	13.8 2.1 11.7	13.9 3.2 10.7	18.3 1.5 16.8	15.2 1.2 14
	防犯や交通安全活動	3.6 2.1 1.5	7.2 1.5 5.7	7.1 ▲ 1.5 8.6	7.4 1.8 5.6	11.1 1.6 9.5	8.4 ▲ 0.6 9
	高齢者や障害のある方への 手助けなどの活動	7.1 4.5 2.6	6 3.7 2.3	8.6 5.8 2.8	10.1 7.4 2.7	16.4 7.6 8.8	12.9 6.2 6.7
	その他	1 0.5 0.5	0.4 ▲ 0.4 0.8	0.6 0.6	2.1 ▲ 0.9 3	1.1 ▲ 2.7 3.8	1.7 ▲ 4.5 6.2

各項目の最大値に ○ を付している。 資料：平成 25 年度第 2 回県政世論調査

「道路・公園の清掃活動や草取りなどの共同作業」から「子ども会や少年スポーツチームの指導や世話」について、その活動内容から (A) 『地域における公共的・義務的な活動』と言えるが、ほとんどの年代においてマイナスのギャップが生じている。これは、子どもの状況や地域的な慣行など自らの意思とは別

の動機による参加が多くなっていることを示している。また、「野球やバレーボールなど、スポーツのサークル活動」、「音楽・写真・学習会など、文化サークル活動」については、(B)『個人の趣味的・教養的な学習活動』と言えるが、こうした活動は参加意向が上回っている。さらに、「防火や防災訓練活動」から「高齢者や障害のある方への手助けなどの活動」については、(C)『地域的・現代的な課題に対する社会参加活動』と言えるが、全般的にプラスのギャップが生じている。



地域活動の状況について、年代やその活動内容によって、それぞれ差が生じているが、(1)、(2)の結果より、生涯学習を推進するに当たっても次の点が課題と考えられる。

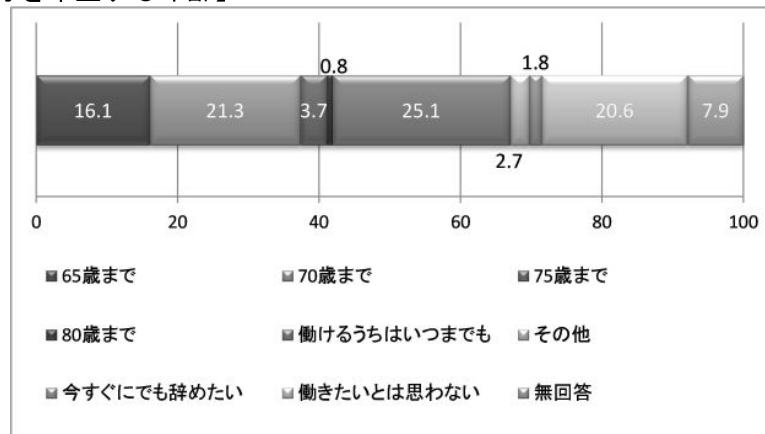
- 定年を控えた年代において、一時的に活動の経験が低下しており、この年代に対する働きかけが必要であること。
- 道路・公園の清掃活動など、地域における公共的・義務的な活動において、意向にそぐわない参加ととらえられていることから、参加することの意義や地域の一員としての立場に気付くよう働きかけることが必要であること。
- 防火や防災訓練活動、交通安全活動のような地域的・現代的な課題に対する社会活動において、実際に参加した以上の潜在的な参加意向があることから、活動に一步を踏み出すための工夫が必要であること。

### 3 高齢者の社会との関わり

#### (1) 就労に関する意識

平成 24 年 9 月から 10 月にかけて行われた内閣府の調査（対象者は昭和 22～24 年に生まれた、いわゆる「団塊の世代」の男女）によると、就労を希望する年齢について、70 歳までとする回答が 21.3%、75 歳までとする回答が 3.7%となっているが、最も多いのは「働けるうちはいつまでも」とする回答（25.1%）であり、年齢にこだわらない旺盛な就労意欲がうかがえる結果となっている。

【就労を希望する年齢】



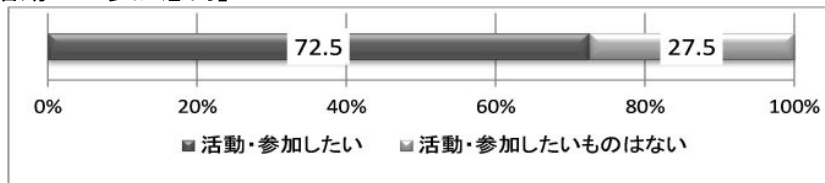
資料：平成 24 年度団塊の世代の意識に関する調査（内閣府）

#### (2) 社会参加活動への意識

平成 25 年 11 月に行われた内閣府の調査（対象者は全国の 60 歳以上の男女）によると、個人または友人、あるいはグループや団体での活動に参加したいと思っている人は、次のグラフ①のとおり、72.5%でおよそ 4 人に 3 人が何らかの活動に参加の意向を持っている。

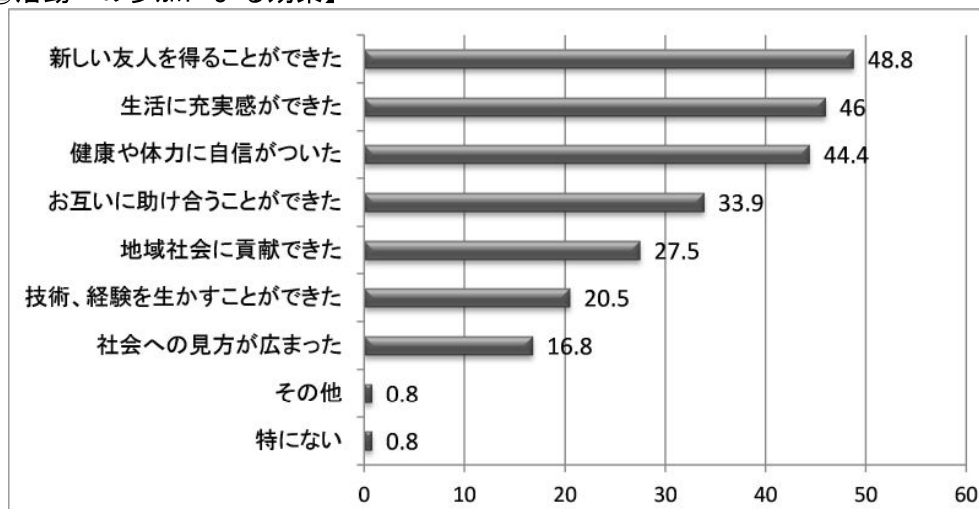
また、そうした活動に参加した人の半数近くが「新しい友人を得ることができた」、「生活に充実感ができた」など活動への参加に対して、肯定的な評価をしている（グラフ②）。

【①活動への参加意向】



資料：高齢者の地域社会への参加に関する意識調査（平成 26 年 3 月）（内閣府）

### 【②活動への参加による効果】



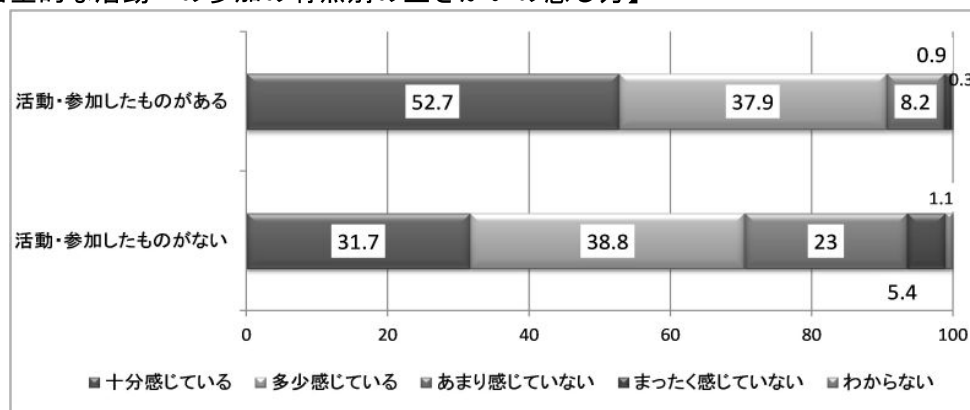
資料：高齢者の地域社会への参加に関する意識調査（平成 26 年 3 月）（内閣府）

### （3）自主的な活動と生きがいの有無

平成 21 年 2 月から 3 月にかけて行われた内閣府の調査（対象者は全国の 60 歳以上の男女）によると、自主的な活動に参加したことがある人は、そのうちの 9 割余りが生きがいを感じているのに対し、参加したことがない人は、7 割余りにとどまり、自主的な活動への参加の有無によって、生きがいの感じ方に差が生じている。

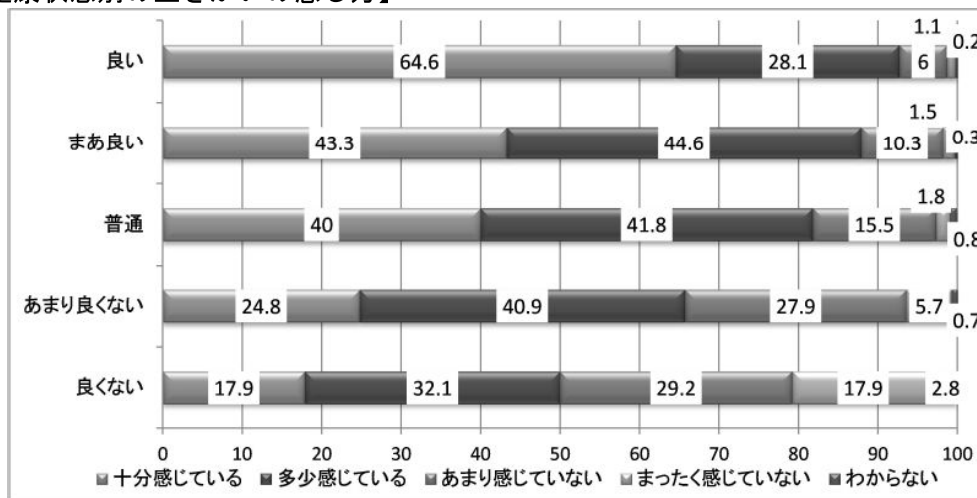
また、健康状態別に見ると、健康状態が良いほど、生きがいを感じている人の割合が多くなり、健康状態を保ちつつ、地域における活動に参加することで、より生きがいを感じられるようである。

### 【自主的な活動への参加の有無別の生きがいの感じ方】



資料：高齢者の地域社会への参加に関する意識調査（平成 21 年 12 月）（内閣府）

【健康状態別の生きがいの感じ方】



資料：高齢者の地域社会への参加に関する意識調査（平成 21 年 12 月）（内閣府）



就労意識や社会活動への参加意欲、生きがいの感じ方など、元気な高齢者は社会に対しても前向きである。人口構造が変わり、今後ますます高齢者が増えていく中、高齢者を上手に取り込んでいけるような社会の仕組みづくりを考えていく必要がある。



## 第2章 超高齢社会における生涯学習の意義

第1章では、本県における高齢化の状況や高齢者の社会との関わりを整理した。名古屋、尾張、西・東三河という地域によって高齢化の進展には差があり、それをさらに市町村別に見れば、より一層顕著な差が生じていること、また、年代によって地域活動の状況は異なっているが、地域には非常に多くの元気な高齢者がいることなどを確認した。

第2章では、最初に生涯学習の理念を整理し、次に高齢者の特長を「サクセスフル・エイジング」(※)の考え方や高齢期における生きがいの研究等を参考にしながらまとめた上で、そのような超高齢社会における生涯学習の意義と期待される役割について、超高齢社会における生涯学習のあるべき姿を述べながら整理をする。

(※) 高齢者の主体性を見直し、自らの力で高齢期の様々な変化や喪失に適切に対処しながら、充実した高齢期を過ごすという考え方。1987年に米国のジョン・ローとロバート・カーンによって発表された。

### 1 生涯学習の理念

平成18年に成立した改正教育基本法では、第3条において、「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」と生涯学習の理念が謳われている。

従って、「生涯学習」という言葉には、人々がその生涯において行うあらゆる学習、すなわち学校のみならず、家庭、社会などの様々な場、文化活動やスポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動などの様々な機会において行う学習が含まれるものである。その中には、企業において行われる教育や個人の趣味的な活動なども幅広く含まれ、決して個人の資質を高める自己完結型の学習のみに限られるものではない。勿論、個人的な興味や関心から行う自己完結型の学習も生涯学習であり、実際にそのような要素をたぶんに有している。ただし、「学びの循環」というように「学び」から「実践」に移行し、実践からまた学び、学んだことをさらに実践に移す、というように学習活動が循環し、その過程において、個人の学習からグループ、団体など仲間による学習活動、さらには地域における活動へと、生涯学習は大きな拡がりを持っていくものである。

## 2 高齢者の特長

### (1) 豊かな経験と知恵

これまで見てきたように、高齢者にはその長い人生によってもたらされた豊かな経験と知恵がある。これは、自身が身をもって経験したからこそ、その当時の記憶とともに蘇ってくるもので、経験から導かれる知恵である。それは、親から子、子から孫へと引き継がれ、伝承されていくべき貴重な財産であり、様々な難局に直面した際に、これを埋もれさせてしまうのは社会にとって、特にこれからの超高齢社会にとっては、非常に大きな損失である。

### (2) 喪失の経験

一方で、高齢期には、身体的な機能の低下に加えて、親族や友人など親しい人との別れが訪れる。そうした喪失の経験は、人による個人差はあるが、高齢期になるほどより顕著となり、そうした経験が、いやがうえにも人生を考えるきっかけを与えることになる。ある市民大学講座において、「最後まで自分らしく生きるために」という講座が設けられているが、それは自らの生に対して、自然と湧き上がる人生観、死生観といった人生の有限性というものを学ぼうとする欲求に応えるものである。

そして、この喪失の経験で忘れてはならないのは、定年等に伴う離職である。今日では、雇用延長や再雇用制度などにより、離職の時期はさまざまであるが、サラリーマンとして過ごす人の場合、必ずいつか離職の時は訪れる。離職に備えて、既に何らかの準備をしていた人ならともかく、それまで仕事に打ち込んできた人の場合、その喪失感は非常に大きなものがある。仕事には社会に対する一定の責任が伴うものであり、そのため仕事を通じて、人は社会と繋がっているが、それがある日を境にして責任とともに失われるのは、心に大きな穴が開いた状態であり、そのような状態では自己を肯定することは難しい。まさに、社会の中で漂流し、行くべき場所を見失った状態であり、一刻も早く抜け出さないと、豊かな高齢期を送るのは困難である。豊かな人生を送るには、まず自己を肯定することから始まり、自己を肯定するためには、自身の立ち位置、存在を確たるものにする必要がある。

### (3) 他者との関わり

自分自身の存在を確たるものとするためには、まず自身が社会において、どこに位置しているかを確認することが重要である。ある目印に対して、近いのか遠いのか、その目印からの距離によって、自身の位置を測定することができるが、この目印が多いほど、明確にその位置を特定できる。これを人間関係、交友関係に置き換えると、この目印は家族であり、友人であり、知人や隣人、同僚である。その距離が近いほど親密度は増し、反対に遠くなれば親密度は低くなる。会っても会釈をする程度、「名前は知らないが顔は知っている。」というような場合、親密度は当然に低くなる。しかしながら、それでも他者と会釈を交わしている自分がいるという事実があり、他者を介して相対的に自分の存在を確認していると言える。これは、言い換えれば、他者という窓口を通じて、社会と既に繋がっているということである。

また、世代間の関わりも重要である。先ほどの友人、知人が横の関わりとするならば、これは年少者、あるいは年長者という時間を軸とした縦の関わりである。伝統芸能や過去に起きた災害の記憶の伝承などは、過去から未来へとつながるものであり、時間軸という縦の関係の中で自身の存在を確認しているとも言えるものである。

このように自身の存在を確認するためには、様々な場面における横と縦の関わりが重要である。この立体的な関わりの中において、自分自身の立ち位置、存在を確認できるのであり、高齢者にとって、これらの関わりを得ることができるのは、最も身近な「地域社会」という舞台である。

## 3 超高齢社会における生涯学習の意義と期待される役割

平成 23 年に文部科学省（生涯学習政策局）が立ち上げた「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」では、「人生 100 年を想定した人生設計が必要である」とされている。100 年とまではいかないが、本県の健康寿命は男性が 71.74 年、女性が 74.93 年であり、サラリーマンが 60 歳で定年を迎えるとすれば、定年後に男性ではおよそ 10 年、女性では 15 年もの長期にわたって、自由に使える時間が残っている。勿論、何もしない自由というものもあるが、これまでに自分がやりたいと思いつつも、時間的な制約のために十分に出来なかったことに取り組んだり、自身の持つ知識や経験を活かすことが出来る活動に取り組んだりすることができる時間である。言い換えれば、自らの意思により、新たなステージで充実したときを過ごすことが可能となる時間である。その基盤となるのが自らの地域であり、

自身の有する知識や経験を活かし、残りの人生に彩りを付ける可能性を持つものが生涯学習である。

先にも述べたように、高齢化は著しい速度で進行しており、私たちはこれまで世界中のどの国も経験したことのない社会に直面している。それに対して、社会の仕組みが十分に対応しているかという点、高齢社会対策基本法の前文にもあるように、「高齢化の進展の速度に比べて国民の意識や社会のシステムの対応は遅れている。早急に対応すべき課題は多岐にわたる・・・」のが現状である。実際に、孤立死や認知症の発症に伴う徘徊など高齢者が関わる痛ましい事故や事件は後を絶たない。こうした深刻な事態を未然に防ぐため、行政機関に求められる役割は当然のことであるが、個人によりきめ細かく、適切に対応していくには、高齢者を取り巻く地域での関わり合いや助け合いなど、地域とのつながりが非常に重要なものとなる。高齢者は豊かな知恵と経験を有している。そして、これらを活用してもらうことにより、個人からグループ、団体、そして地域へとつながり、それまでの企業等での経験とは異なる新たな生きがい、やりがいを得て、生き生きと人生の次なるステージを過ごしてもらうこと（**充実感の創出**）が、超高齢社会において求められる生涯学習の姿である。

また、やりがいを感じながら、生き生きと地域活動などに参加して社会とのつながりを持ち、よく外出する人ほど、長生きであることがわかっている（※）ように、様々な活動により体を動かすことで、健康が維持され、介護予防にもつながっていくこと（**健康の維持**）を忘れてはならない。

さらに、超高齢社会と言っても、社会は高齢者のみで構成されているのではなく、子どもから高齢者まで、少年や青年、壮年などいろいろな世代によって構成されている。高齢者のみが豊かな人生を過ごせる社会などはあり得ず、あらゆる世代が豊かに過ごすことができる社会が豊かな社会であり、世代間の相互理解が非常に大切である。そのため、生涯学習を通して、異なる世代間の交流を促していくこと（**世代間交流の促進**）が強く期待される。

加えて、世代間の交流を進めながら、支援が必要な家庭の問題、ゴミ問題や買い物弱者など身近な課題、南海トラフの巨大地震に対する防災・減災対策など地域の課題解決にも参画してもらうことで、地域づくり、まちづくりなど地域の活性化につなげること（**地域への貢献**）もまた、生涯学習に期待される重要な役割である。

生涯学習は活動を通じて、個人の内面や生活を豊かにするだけでなく、その成果を活かすことにより、世代間交流の促進や地域への貢献なども期待することができ、地域が多様化・複雑化する中で、ますますその必要性が高まってきている。

（※） 星旦二（首都大学東京）らによる多摩市高齢者実態調査、13,066人（2001年に65歳以上）の6年間追跡研究による。

## 第3章 超高齢社会に対応した本県における取組

第3章では、超高齢社会における生涯学習の意義と期待される役割にかかる取組のうち、本県において行われている取組について確認をする。続く第4章では、世代間交流の促進や地域への貢献など、生涯学習に期待される役割について、市町村や住民グループ等において行われている先進的な取組を中心に確認をする。

### 1 充実感の創出や健康の維持に向けた取組

#### ○生涯学習情報システム「学びネットあいち」の運営（生涯学習課）

インターネットを通じて、県や市町村を始めとした様々な生涯学習関係機関や団体が有している公開講座等の学習情報を広く県民に提供するシステムを運営している。平成26年度にシステムの改修を行い、操作性を向上させるとともに、スマートフォン等での動画視聴も可能とし、いつでも、どこでも必要に応じて学ぶことができるシステムとした。

また、県内市町村や大学等高等教育機関の生涯学習関連サイトともリンクし、各種公開講座や学習イベントなどを容易に検索できるようにして、スマートフォンやタブレット端末等、ICT（※）を活用する高齢者も増加する中、新たな学習の場の開拓など、県民の多様な「学び」に対する欲求を充たし、新たな生きがい、やりがいを見つける手助けとなっている。



（「学びネットあいち」トップページ）

- ・ 情報登録件数：13,212件（うち学習コンテンツ件数：536件）
- ・ 情報提供機関数：1,719機関（いずれも平成26年度末時点）

（※）Information and Communication Technology の略。情報通信技術のこと。

### ○生涯学習情報誌「まなびいあいち」の配布

(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団)

インターネットによる情報検索が苦手な人でも、様々な生涯学習情報を得られるよう、生涯学習やボランティアに関する情報、生涯学習に関するトピックスなどを冊子として見やすく作成し配布している。

- ・発行時期：年4回発行（6、9、12、3月）
- ・配布部数：各号8,000部
- ・配布先：市町村、大学・短期大学、

社会教育関係団体、図書館、博物館物館、美術館、県関係機関等



(「まなびいあいち」表紙)

### ○「愛知スポーツ・レクリエーションフェスティバル」の開催

(保健体育スポーツ課)

生涯にわたって生活の中にスポーツ・レクリエーション活動を取り入れて、健康で明るい生活に寄与することを目的に、グラウンド・ゴルフやラダーゲッター等の生涯スポーツ型の種目による大会を開催している。

多くの高齢者がスポーツ・レクリエーション活動を通し、健康づくりに取り組むことができるよう高齢者にも参加しやすい種目を多数実施しており、65歳以上の高齢者の参加割合は32.5%（平成26年度）となっている。



(グラウンドゴルフの様子)

### ○あいち海上の森センターにおける活動（森林保全課）

海上の森の保全と活用を図るため、あいち海上の森センターでは、森林や里山の学習と交流の拠点として、体験学習の実施やあいち海上の森大学等による森林・里山で活動する指導者等の育成を県民参加組織との協働で行っている。定年退職後のシニア世代の参加も多くみられ、修了生はその後、海上の森や県内外の森林・里山で活躍している。

## ○「あいちシルバーカレッジ」の開催

(高齢福祉課：(社福)愛知県社会福祉協議会へ委託)

高齢者に学習の機会を提供することで、その学習意欲を喚起し、高齢者の生きがいと健康づくりの促進を図るとともに、地域における社会活動の中核となる人材の養成を行っている。



〈対象者等〉

愛知県内に在住の満 60 歳以上の者で、募集人数は 600 人 (平成 27 年度)

県内 6 会場にて開催

(シルバーカレッジ入学式の様子)

カレッジ名	会 場	学 科 ・ 定 員
あいちシルバーカレッジ名古屋A	愛知県社会福祉会館	文化教養学科 100名 生きがい健康学科 50名
あいちシルバーカレッジ名古屋B	愛知県社会福祉会館	文化教養学科 100名 生きがい健康学科 50名
あいちシルバーカレッジ豊橋	豊橋市民センター	文化教養学科 90名
あいちシルバーカレッジ岡崎	岡崎市図書館交流プラザ	文化教養学科 50名
あいちシルバーカレッジ一宮	一宮市地場産業ファッションデザインセンター	文化教養学科 90名
あいちシルバーカレッジ東海	東海市保健福祉センター	生きがい健康学科 70名

〈学習内容〉

学 科	学 習 内 容
共通科目	一般教養科目 相続・遺言の一般常識、私たちの暮らしと経済、クラシック音楽への誘い など
	生きがい活動 応援科目 地域社会と高齢者、今の人生に楽しさと生きがいを、生涯学習と高齢者 など
専門科目	文化教養学科 専門科目 すしの文化史、地域のことば、外国文化、川柳を楽しもう、古画を読む など
	生きがい健康学科 専門科目 高齢者の心理、介護の知識・介護の技術、認知症について など

### 高齢者大学について

日本において高齢者の学習が行政的に位置付けられたのは、1965年から70年にかけて文部省によって行われた「高齢者学級」開設の委嘱事業に求められるが、高齢者の学びのための「大学」の草分け的な存在とされているものに、兵庫県の「いなみ野学園」がある。当学園は1969年に県立農業短大跡地（加古川市）に開設され、77年に県・市長会・町長会・同窓会・学生自治会の協力によって設立された財団法人兵庫県高齢者いきがい創造協会による運営に移行し、現在に至っている。高齢者の総合的かつ組織的な教育施設として設置され、四年制の大学に加え、指導者養成コースとして二年制の大学院があり、午前に教養講座、午後に園芸や福祉などの専門講座が開かれている。この他にもクラブ活動や実習活動などもあり、一般の大学に類するようなカリキュラムが組まれている。

### ○「生き生き長寿フェア」の開催

（高齢福祉課：（社福）愛知県社会福祉協議会へ委託）

市町村の老人クラブ連合会やシルバー人材センター、民間企業など多数の団体が出展し、いきいき体操やマラソン交流大会、異世代交流促進事業（ウォークラリー）等の健康イベントを開催している。

参加者は年々増え、平成27年度は約9,500人が参加し、生きがいくくりや健康づくり、世代間交流等を行っている。



（生き生き長寿フェアの様子）

### ○全国健康福祉祭（ねんりんピック）への選手派遣

（高齢福祉課：（社福）愛知県社会福祉協議会へ委託）

豊かで活力ある長寿社会の形成を目指して、卓球やマラソンなど、様々なスポーツや文化種目の交流大会を始め、健康や福祉に関する多彩なイベントを行う全国健康福祉祭（ねんりんピック）に県選手団を派遣している。

平成27年度は山口県で開催され、水泳やマラソンなど多くの種目で優勝者（入賞者）を出している。